室蘭工業大学
学術資源アーカイブ
Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive

民衆文芸を考えるための基準と民衆文芸の概念について：研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史学-民俗学中央研究所ヘルマン・シュトローパハ「ドイツ民衆文芸入門」序文

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 室蘭工業大学
	公開日: 2014-03-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 坂西, 八郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/2841

民衆文芸を考えるための基準と民衆文芸の概念について

—研究資料・編訳：ドイツ民主共和国・ベルリン科学アカデミー・歴史学-民俗学中央研究所　ヘルマン・シュトローバハ「ドイツ民衆文芸入門」序文—

坂　西　八　郎

Kriterien und Begriffe der deutschen Volksdichtung*)

Übersetzung aus dem Buch :

„Deutsche Volksdichtung. Eine Einführung“ (Hrsg. V. Hermenn Strobach, Leipzig : Verlag Philipp Reclam jun. 1979)

Hachirō SAKANISHI

Abstract

There have been many of standpoints to observe the phenomena of the folklore. Hermann Strobach with the standpoint of marxism analyzes the relation between the social development and the folklore. He finds, the creative activity of the people is the most impotant moment for the formation of the variations in the field of "oral tradition".

---

*) This paper is a translation from the book : Deutsche Volksdichtung (ed. : Hermann Strobach, Leipzig : Verlag Philipp Reclam jun. 1979)

1). 現在の状況と問題点

民衆文芸 Volksdichtung とはなにか？この問題は今日ふたたび国際的なひろがりをもってとくべつ活発に論議されている。このような事態をまねいたさまざまな本質的動機が，現代の文化の進行過程のなかにあることには疑いの余地はない。発達した社会主義社会においては勤労者がさまざまな文化活動を展開し，かれらが文化遺産を受容できるさまざまな機会がふえてきた。現代の歌曲創作・歌唱運動や市民合唱団などに生じている現象と傾向，さらにまた労働者がすすめている著作運動*)の状況をみると，あらためて民衆文芸の概念はなにか，民衆文芸が歴史と現代にもつ意義はなにか，ということが考えさせられる。

民衆文芸というものは過去のある一定の時代に生じた特有な現象であって，今日ではもう残り滓となって文化発展の主流からは離脱しているものなのか。あるいは現代においてもなお民衆文芸の継続的な発展は可能なのか。この問題が論議の中心にくる。そしてマルクス主義民俗学者のあいだでもこれについての論議の余地はなおおおい。

2). 考 察 の 方 法

これにこたえるためには，－そしてそもそも民衆文芸の本質はなにかということをあきらかにするためには，われわれの考え方によれば歴史的に考察することから出発しなければならない。民衆文芸は静止した均質の構成物**)ではなく，歴史とともにつねに変化し発展する現象である。このことをどんな歴史的分析も実証している。社会的現実がかわれば人びとのさまざまな生

---

*) Bewegung schreibender Arbeiter ；ドイツ（西・東）のみならず，ヨーロッパにおいては日本と異なり知識人と普通の勤労者の知識の格差があまりにおおきく，普通の勤労者は新聞もよまない。西ドイツにも現在おおくの文盲があるといわれる。東ドイツでは社会主義体制をとってからはじめて勤労者も執筆するように政府がうながしている。

**) ein gleichbleibend einheitliches Gebilde

活状況や生活の方法，また意識や教育のレベルもかわり，そのたびに異なる芸術的表現形式を必要としてきた。民衆文芸はこのように歴史的な性格[a]をもつ*)。民衆文芸が社会的・文化的にはたす機能の変化や，民衆文芸の形式・内容，ジャンル・タイプ・発生・由来・伝播などの徹底的な変化[b]も，何千年にわたる歴史の発展過程で生じたのである。

3)．定義・判断の基準のとり方の問題点

民衆文芸の本質を規定しようとするとき，歴史的に限定された個別的な現象を全体につうずる判断の基準としてもちあげるならば，結局は歴史にそぐわない不当な結論に到達してしまう。これは民衆文芸のさまざまな定義にしばしばみられることである。民衆文芸の特殊な性格をつかむために基礎とされたこのようなまちがった基準のとり方は，文献のなかにもみかけることができ，めずらしいことではない。二・三の例をみてみよう。まず民衆文芸発生の無名性ということ Anonymität der Volksdichtung, さらには「創作説」Produktionstheorie で，民衆文芸はもっぱら民衆自身のなかからのみ発生したとするもの。あるいは反対に，民衆は高度な文芸を受容するだけだという考え方，つまり民衆文芸の根源は民衆の外部，すなわち支配階級のなかから発生し，民衆はそれを受けいれるという「受容説」Rezeptionstheorie。また創造過程の集団性 Kollektivität des Schaffensprozesses を基準としようとするものもある。ついで口伝-記憶伝承 Mündlich-gedächtnismäßige Tradierung を重視しようというのもあり，これと関連しては，民衆文芸のあらゆる伝承は形式・内容ともに変化してしまうのだ，という説がある。さいごに民衆文芸は一般的な特性としては民衆とむすびついた人道的内容をもち，その表現するところは進歩的だという説がある。なおこの説によって民衆文芸は

---

*）原文では，民衆文芸のこの歴史的な性検[a] dieser historischer Charakter（主語）は…徹底的な変化[b] のなかに…しめされる kommt zum Ausdruck とある。一つの原文章を二つの日本語文章に翻意した。原文はわれわれにとって論理的にくどすぎるので，以下何ヶ所かで同じ操作をした。

「第二の文化」zweite Kultur であると単的に表現されている。

4).「口伝-記憶伝承」Mündlich-gedächtnismäßige Überlieferung 説について

民衆文芸の本質を記述するさいにもっとも頻度たかくとりあげられる基準は「口伝-記憶伝承」で，これがもっとも重要なものとされる。「口伝-記憶伝承」がながいあいだの歴史的時代にわたり民間伝承の存在の仕方の特徴となっていることはあきらかである。しかしこれも伝承行為の優勢な形式であるとはいえ一つの歴史的現象にすぎない。またこれは歴史的にみて，民間伝承のみに特徴的なものというわけでもなかった。ある一定の文化段階，一般的にみて人間社会の初期の発達状態における文化段階では，これにみあった唯一の，あるいは優勢な伝承方法でありうる。ドイツとヨーロッパ文化の展開領域の外をみわたせば，敵対分化した階級的関係を土台として，高度に発達したポエズィーの諸領域があるのに気がつく。このポェズィーは何百年以上も文字に固定されることなく後世につたえられてきた。初期封建社会の貴族による，あるいはかれらのために創作された文芸作品はかなりおおくの点で，また成熟した封建社会に生じた文芸作品もなおひきつづいて，しかも全体としては「口伝-記憶伝承」性を，またテキストの点では「無名性」と「変化性」を特質としている。したがって「口伝-記憶伝承」の様式による作品がはぐくんだ即興技法は，たとえばドイツの宮廷のミネザングを例にとれば，14 世紀にいたるまでみかけられる。中世の学生たちのうたったラテン語の歌曲は，ミネザングとおなじくヴァリアンテ*) でうたいかえられた。これについては，口頭伝承された民衆の歌謡を例として，のちにみることができよう。とくに中世の遍歴楽人たちは，宮廷や初期都市の市民を聴衆として，あるいは農村でうたい，「口伝-記憶伝承」詩の様式や即興技法にみがきをかけた。この楽人たちは書かれた手本をみずに記憶により，また手工業的に習得した

*) Variante：異文 —— 以下ヴァリアンテ。

技法である作法をたよりにうたったのである。

5). この説の妥当する歴史的・社会的な場

「口伝-記憶伝承」の方法は，きわめてながい期間にわたり，勤労し搾取される民衆のあいだにとくに存続しひろくもちいられていた。その具体的な状況は，階級の対立する社会のさまざまな発展段階において，ある階級や社会層のもつ経済・社会的諸条件や，それに起因する人びとの生活方法，精神的・文化的生活をいとなむさまざまな可能性によってきめられた。「口伝-記憶伝承」が支配的な伝承形式となるのは，大部分の文盲であること，また人びとのあいだにある文字を読み書く能力がきわめて低く，読み書きのできる人びとがきわめて少ないからである。だから封建社会の農民ととくに都市で手工業にたずさわった庶民層の民衆文法についても，「口伝-記憶伝承」の方法は本質的基準となる。初期のプロレタリアートやとくに農村の貧困層のような搾取される勤労大衆の部分にとっては，口伝によるコミュニケーションは-すくなくともその一部は，資本主義的社会秩序の出現と完成の時代にいたるまで，なお文化的な意義をもっていた。この伝承形式の特質は，テキストが伝承者のあいだの直接の個人的接触によって再現されることである。口から耳へと他の媒介物なく原始的におこなわれる。したがってこれを国際的研究では「口頭伝承」Orale Tradition と名づけている。

6).「口伝-記憶伝承」の特質

「口伝-記憶伝承」が社会的に優勢を占めていると，その特徴的な帰結現象として，さまざまな伝承のなかに変化しうる形式が生じてくる。同一テキストをもちいてさまざまな歌い手や語り手が同時に演じたものの記録，あるいは時間的にあいついで演じたものを -もちろん同一の演奏者によるものもふくめ- 比較してみよう。そこにはきわめて異なるおおくのヴァリアツィオーン形式のあることがわかる。いろいろな単語が除去されたり付けくわえられたりされている。似たひびきの単語（たとえば Welt-Feld のごとく）とか，

同一ないし互いに似た意味の単語（たとえばging, kam, zog, schritt, reiste)*)は，相互に入れかえられる。またそれほど頻度はたかくないが，まったく違う言明をする単語が交換されることもある。場所や人物の名前をとりかえることにより，物語り・諺・歌謡などがきわめて異なる状況に適合させられる。さらにまたテキスト・ヴァリアツィオーンの形式としてみられるのは，言葉の順序の変更であって，いきつくところ歌謡における詩句群や詩節，また物語りにおける挿話とか題材の複合が，序述上の位置をそっくりかえられたり，また除去されるということまで生ずる。さまざまなテキストやあるいはその一部分に，混和（コンタミナツィオーン**)）がしばしば生じ，また内容か形式のうえで近接（ -テキストは類化***)）してゆく。あたらしい詩句や詩節が創作され，付けくわえられ，あるいは物語りのなかのある一つの単位がそっくり創作されたり付けくわえられたりすることにより，全体に根本的な変化が生じうる。以上にのべたようなヴァリアツィオーンの形式 -すなわち個々の単語の交換・単語または大きなテキスト単位の位置の変更，さらにテキストの混和などを特徴とするヴァリアツィオーンの形式- にくらべると，本当の新作とか作品の拡大などにわれわれが遭遇するのは，かぞえてもわずかなことである。

7）．変化性の大きな法則

口頭伝承において，物語りや歌謡が完全におなじ形式で再演されるということはほとんどない。テキストは全体的に揺れ，変化しうる性格をもつことを実証している。だからおもに「口伝-記憶」により伝承される民衆文芸では，変化性は全体にわたる現象形態であって，多数の個別ヴァリアンテの集合のなかにあらわれる。この変化性は恣意的に生ずるものではなく，そこには一定の法則性がある。そのおもな傾向は以下である ——：あるテキストの比較

---

*）場所の移動をあらわす単語で過去形。

**）Kontamination

***）Textaffinität

的安定している部分と変化する部分が，テキスト全体の意味構造と形式構造にたいしてどのような関係をもつのか，これがまず第一に法則を律している。単語・構成部分・様式・題材・題材の複合・詩句の一部分・詩節などが，全体の意味構造と形式構造にたいして重要性に反比例して変化する。だから全体の言明するところにとってまったくどうでもよい，重要ではない部分がもっとも大きく変化する。意味に関係するもののうち変化性がもっとも大きいのは簡単に交換しうる同義語（たとえばLust, Freude, Spaß*）および交換しうる人物名や地名などである。他と比較して固定したままであるのは，もっとも重要な単語・語群・言明の複合・題材の複合である。ここにはテキストの深い意味がこめられているが，テキストの特殊な性格やテキストのはたすある一定の機能が表現されている。さらに固定している要因は全体の構造にかかわる形式の要素で，韻律と脚韻・詩行のはじめと終結・対句・慣用句の順序・形態と構造上の図式といったものである。

8）．変化性の条件

これとは反対に個々のヴァリアンテが発生する条件はきわめて多層的といえる。歌手や語り手は，それぞれに一定の経済的・社会的な，また政治的・文化的なさまざまな関係によって規定され鋳型にはめられているが，逆に歌唱・語りの活動をもって，かれらを規定するその関係に影響をおよぼす。ヴァリアンテの発生する条件は，この人びとの歌唱や語りのなかにあり，歴史的・社会的現実のなかにある。すなわちテキストの言明するものとその機能が関係する範囲，さらに歌手や語り手・聴衆がおかれた社会的・思想-文化的状況・人びとのおかれた具体的な生活条件と生活方法などのなかにある。くわえて言葉とその音響的・文法的・辞書的所与がヴァリアンテ発生の条件としてある。だが言葉における評準語間の，またさまざまな方言間の，また様式間の，そしてその他の差異がとくに作用する。そして最後にヴァリアンテは歌唱と

*）なにかやる気，楽しい気持などに関連する単語で名詞。

物語りの伝統にもとづいて発生するが，これもある一定の階級と社会層，あるいは異なる地域によって内容も演奏の機会も上演法もそれぞれにちがうのである。こうして，民衆文芸の全領域のなかに社会的に差異のあるかなりおおくのさまざまな伝承（ -たとえば織工の歌謡・格言，船員の歌謡・物語り，労働者歌曲その他）が生ずる。また地域的なさまざまの伝承，地域的な様式の個有性をもった（ -一つの地方または一つの場所にむすびついた，あるいは部分的に特有な色彩と性格をもった)特語り- 歌謡財が形づくられる。そのようにして一つの地方で鋳造されたさまざまな伝承は，その土地の住民とは一致しうる。近年来，おおくの歌集・民俗保存協会の冊子・同協会の活動・地域の雑誌・他の印刷物などによって -部分的には今日まで- 民衆文芸は生きたまま保存されている。

9). 安　定　性

口頭により伝承される民衆文芸がうける変化は補修される。しかも伝承された資料は相対的に安定する傾向をもつので，さまざまな変化がある意味で相殺される。この傾向は，歌手や語り手およびその人たちの集団のもつ主観的な態度のほか，とくに人びとをとりかこむ客観的なさまざまな要因によって規定される。もっとも本質的な要因は，「口伝-記憶伝承」をおこなう集団作業という特殊な形式であるが，この集団的伝承のやり方は社会的文化的発展の一定の段階に照応している。さまざまなテキストをおおくの収集記録やまたさらに伝播の姿と比較してみると，風土的に関連したある限定された地方で記載された一つのテキスト型は，相対的に相互の偏差がすくない。だが，他の諸地方における収集記録にたいしてはかなり強い偏差をもち，したがってヴァリアンテ群をつくる。これはフェルズィオーン*) とかオイコテューブ**) とかいわれる。こうしてできる民間伝承の相対的安定性は，まず伝承の高い密度によって維持される。歌手や語り手，そしてその集団がたがいに緊

*) Version
**) Oikotyp

密で直接的な接触をくりかえすならば，テキスト型も恒常的に相互関係をもち，偏差は相互に「修正」される。

10).「歌いくずし」Zersingen と「語りくずし」Zersagen

ある階級や社会層の内部で相対的に安定している諸集団によって活発な伝承がおこなわれるという條件がある。いわゆる「歌いくずし」と「語りくずし」，すなわちテキストの破壊という「口伝-記憶伝承」における独特な現象が生ずる。だがこれはつねに歌手や語り手の相互接触によってならされる。このときにはおもに創造的な「歌いかえ」の形式，-かわった状況や関係にみずからもかわりつつ適合・順応し自己保存をはかる形式- に制御されながらテキストがかわってゆく。それに反して，一般的な傾向として，かなり強度な「歌いくずし」や「ほぐれ現象*)」は，辺境地域につながる伝承地域にあるテキスト型や，孤立して遠く点在しているものにみられる。テキスト形式のくずれは，伝承の空間的境界にのみ生ずるのではない。時間的にも考えられなければならない。ある歴史的時代にのみ生き，他の時代の民衆文芸のなかではもはや生きえない，いわば個々人の記憶のなかにのみとどまるテキストは朽ちていく，テキスト形式の「歌いくずし」や「ほくれ現象」は民間伝承の本質ではない。むしろ境界現象といえる。これは一般的傾向として，さまざまなテキストが地理的にも歴史的にも民衆の生活とむすびついている濃密な伝承の外部，すなわち生きた民衆文芸であることを止めはじめたか，止めはじめるであろうところで観察される。

11). 変化性の基本傾向—変化と保存

変化と保存が「口伝-記憶」による民間伝承のもつ客観的な基本傾向である。テキストが広範にひろまっている民衆文化財であるならば，この二つの傾向は相互に制約し作用をおよぼす。過去から与えられた伝承と前提となる事実

---

*) Zerfasern

は，伝承をおこなう階級と社会層をつらぬいて変転しつづける。あらたに伝承すべき文化財を恒常的にとりこむのである。また保存の傾向，相対的な安定性への傾向も，文化を保持する要因として作用し，伝承文化財の崩壊に対抗する。

12). 変 化 の 特 性

「口伝-記憶伝承」の方法による活動によって，文化史的にみて特殊な性質をもつある種の言語芸術の作品も創作される。これは伝承をおこなう集団の想像（表象）の世界で慣習的用語をもちいてなされる。そしてこれは能動的なかつ恒常的に作りかえられてゆく再生産である。これによって基本的に民衆のすべての成員が文化生活に創造的に参加する可能性がなりたつ。そして伝承活動に才能あるあらたな歌手や語り手が歌手や語り手集団のなかにそだち，活発な活動をおこなう。テキスト形式をあたらしく創作したり付けくわえたり，根本的に変更をしたり，あるいはそのまま継続してゆくことなどが，その人たちにまかされる。このあたらしい創作物は，歌手や語り手集団にうけいれられるか，あるいはふたたびとりのぞかれる。それはこの創作物がその人びとの生きる社会の社会的・精神的・文化的発展段階における生活観念や文化的要素・審美観にふさわしいか否かにかかっている。個人も集団も変動する状況のなかにいる。民衆はその状況にあって，文化的活動をしたい，生活を表現したい，と要求した。この要求が伝承されたさまざまな民衆文芸の相互にいりくんだ内容・形式およびヴァリアンテを形成し，今日では人類の文化発展の重要な遺産となっている。

13). 創作活動の限界性

だが同時にこの創造活動の限界性もみのがされてはならない。この創造活動は，階級の対立するさまざまな社会の勤労人民が，きびしい生活状態におかれていること，また教育・文化水準において制限をうけていることによって規定されている。まずこの限界性は，おもに「口伝-記憶」による方法がな

されることを特徴とする歴史的段階に生きる民衆文芸が，あたらしい創作やさまざまな自立タイプよりは，はるかにおおくヴァリアンテや別の言いまわし，また混合を示すことをみればよくわかる。ついで民衆文芸は，文芸の領域における人類の文化の重要な進歩，つまりロマンの創出，大きなドラマティックなさまざまな形式をつくりだすことができなかった。この事実はとくに限界の特質を示す。

14)．民衆文芸と他の文化との関係

このようにかなり制限をうけていたのにもかかわらず，比較的ふるいドイツの民衆文芸でさえ -農民の文芸も- 閉じた体系ではけっしてなかった。成熟期封建主義時代以降の文献の状況にもとづいてわれわれが概観しうるかぎりでも，搾取される勤労階級と社会層の内においても外においても，民衆文芸の資料についてその発生と由来が確認される。後期中世の時代には，とくに聖職者および封建貴族・都市貴族の文献からとりいれられたテキストが，都市や農村の中・下層の住民の伝承にくみいれられていたことがわかる。修道院の笑話・説教用のおとぎ話・謎かけあそび・教会の聖人伝説などもその根跡を民衆文芸のなかにのこしている。また宮廷・騎士の叙事詩に由来する愛（ミネ）の歌曲・題材やエピソード，あるいは初期都市市民の諺詩などもおなじく民衆文芸のなかにくみいれられた。遍歴僧職者や楽士たちがその間の媒介者として何度も登場したであろう。この媒介者によって他の国ぐにや民族の文学や文化の題材が， -なおその一部は遠くはなれたところからやってきてドイツ民衆文芸のなかに流入したことはいうまでもない。15世紀のあわりと16世紀，とくに都市･農村の下層民の伝承を規定していた口頭伝承文芸と，上昇しつつあった市民層の文学はたがいに緊密にふれあうようになった。その結果ルネサンスの小説の題材や市民階級の歌謡・寓話・諺・笑話などの文学作品が民衆文芸のなかにとりいれられることになった。民衆の読書能力が次第に向上し（ -貧しい民衆のあいだでは文字をよむ人ははじめは数えるほどであったが)，16世紀はじめの20～30年代以降書物印刷がゆきわた

るようになったとき，印刷物の影響をさまざまにうけたため民間伝承の口承性はおわりをとげた。印刷物としてビラ刷り・ポピュラーな歌集・民衆本・諺および物語り集・入信をすすめる宗教書・カレンダーその他をあげることができる。とはいえわれわれは，伝播のさまざまな形式の大部分がいぜんとして聴衆をまえにした演唱・朗読であったと査定できる。のちになって下層民出身ではあるが文字を書くことのできる人びとが手書きの歌集・諺の本・物語り本を考案しはじめた。16世紀以降のものとして，封建貴族階級の文化に由来するか，あるいはとくに上昇を志向する市民階級の文化に由来する文学財にたいする「アダプツィオーン*)」が数多く確認され保存されている。これは17･18･19世紀の民衆文芸資料の大部分の特徴をなしている。実証主義･ブルジョア的研究**)は，民衆のなかにひろまった歌謡について，テキストやメロディーを創作・作曲した無数のおもに市民層に属する作者をひとりひとり探査した。これによって民衆文芸の特徴は「無名性」にあるという，とくにロマンティクの蒐集家や研究者の公理は完全にうちやぶられた。「無名性」は発生問題の一般的な基準ではなくなった。作者の名前その他にかんする知識がうしなわれている歌謡資料の伝播範囲において，この「無名性」は第二次的基準として有効なだけとなった。

15). 「沈降文化財」Gesunkenes Kulturgut の理論

支配的な既成の文化ないし上昇期ブルジョア階級の文化に由来する文学財がこのように下層大衆にうけいれられている状況をブルジョア**)民俗学者は絶対化した。そしてドイツの資本主義が帝国主義の段階に移行した今世紀のかわり目以降，いわゆる「沈降文化財」理論を発展させ，理論的には正しくない結論にもとづいて民衆を誹謗するにいたった。この理論によれば，いわゆる「上層」だけがつねに精神的に生産的であったという。それどころか，

---

*) Adaption

**) マルクス主義的研究に先行するものとしてこの用語がもちいられている。

この理論の代弁者は下層の民衆を非生産的でただ文化財を受動的にうけいれる能力しかないものとする。下層の民衆のための文化財は上層からいわゆる「沈降」してくるのである。最上の場合にでもこの理論の代弁者は民衆に「幼稚」な詩らしいものを創作する権利をみとめてやったにすぎない。このような「理論」はどんな学問的知見とも矛盾するのだ。

16).「沈降文化財」理論の批判

まず第一に，ドイツ民衆文芸それ自体のなかに，下層民衆の出身の人びとの創造的精神活動にその発生を負っているものの無数の証拠がある。その他このテーゼは世界のいろいろなところにいる民族，しかも未だ階級対立社会を形成しなかったさまざまな民族のなかで集められうるゆたかな詩的諸伝統によって否定される。

第二に，勤労者の階級と社会層の外の部分で生じ，遍歴楽士や教会の説教・印刷物およびその他の手段によって伝播されることになった文芸とその題材を民衆が受容する過程は，受動的な過程であるのみならず，おおくの面で積極的な文化活動の展開過程である。これはとくに題材の選択と獲得にあらわれ，また民衆の生活・想像・伝承のなかにくみいれるやり方のなかにあらわれている。

その第三に，最古の文献以来，この理論とは反対の方向をたどる文化の流れがあることを示す証拠が無数にあげられている。すなわち支配階級の文化のなかに民衆文化がとりいれられるということである。そしてこの民衆文化のもつつよい生産的な活動力は，民衆の側に発し，封建制度下の支配的なさまざまな文化ないし上昇期資本主義を形づくる文化に影響をおよぼし，歴史的に使命をおびた勤労者の階級にいたるまで貫徹する。16世紀の初期ブルジョア革命の時代以降，上昇する市民的文学が民衆文芸を獲得することは，とくに三月前期までのシュトゥルム・ウント・ドラングの進歩的な文学的潮流においては，民衆と結びついた現実主義的な傾向をつくりだすためのおおきな意義をもった。

17). 民衆文芸のもつ保守的な性格と役割り

もちろん伝承された民衆文芸は理想化され，牧歌的な姿をあたえられたとおもわれる—もし重要な事がみおとされるならば。民衆の意識・教育状況には歴史的に規定された限界がある。そのため支配階級の領域から文学的証言や題材を受容するにともない，既成の階級関係と搾取関係の保守・粉飾・偽装に役だつおおくのもの，つまり意識のもち方，世界像，また社会的な価値観念などが民衆文芸のなかにすすんで侵入し，また民衆によって導入された。-こういう事実がみおとされるならば...勤労階級や勤労者層の利益にそぐわない，あるいはもはやそぐわなくなり，客観的には支配的な社会組織を支持するか，あるいは進歩的な世界像を具現しているとはいえない意識段階- たとえば歴史を超えて生きのびた魔術の言葉や神秘的民話など，これを民衆自身のなかに発生した文芸もしばしば反映している。民間伝承は反封建的であり，のちには反資本主義的であり，その根本傾向においては民主的である。そして最終的にはプロレタリアートのなかで社会主義的な考え方と立場を形成する。人類文化の発展における進歩的階級の戦列を構成する要素であり，レーニンはこれを「第二の文化」と形容している。抑圧・搾取・イデオロギー上の監視・操作をうける社会関係にあっても，それによって民衆が進歩的に生を肯定し，生の主張を表現する文芸と伝承も，よりひろい意味ではおなじく進歩的戦列の構成要素をなした。

18). 民間伝承を一面的に理解する危険性

以上に批評したいくつかの基準は，いずれも民間伝承のある一面の性格をえがきだすか。歴史的に限定された局面を一般化するだけである。こうした基準を絶対化することは，必然的に非歴史的な抽象化にいきつき，その結果は民衆文芸の本質をせばめ，一面的に考えることになる。さまざまな社会形態における詩的な民衆文芸の具体的な歴史的発展と多層性をこのやり方で公平に理解することはできない。それどころか，ある一定の期間か，かぎられ

たある一定の素材領域以外の民衆文芸の存在はみえなくなる。すなわち，ある一面的または非歴史的に絶対化された基準が，文化的現象か内容的基準として特徴的である期間の民衆文芸と素材領域の外にある民衆文芸の存在はみえなくなるのだ。

19). 民衆文芸の総体的特徴 —— 変転と多層性

それに反して，民衆文芸の一般的なさまざま現象型態を形づくっているのは，歴史的変転・社会- 文化的・機能的および美学的多層性であることはあきらかである。そしてこの変転と多性性が，個々の様式と題材のみならず，勤労する階級・社会層の言語- 芸術的伝承総体の特徴をなしている。だから民衆文芸の社会- 文化的なさまざまな機能は，歴史的過程のなかで変化し発展するのであって，さかのぼるさまざまな歴史上の時期やまた現代においても，さまざまな階級と社会層においてそれぞれことなりうる。たとえば15世紀および16世紀初期の文献のなかにはじめてドイツ民衆文芸の濃密な伝承があらわれるが，これらの伝承は歌謡と物語りのさまざまな伝承・中世短唱句・多様な韻文的型態をもって形づくられた生活経験が，農村と都市下層民の精神文化のなかでもっとも重要な構成部分であったことを示している。しかし都市ブルジョアの中間層，すなわち同業組合の親方と小商人にとっては，上述の民衆文芸のさまざまな伝承と並行するものとして，文学的題材とそれをもちいたさまざまな作品が高い意義をもっていた（ -たとえば職匠歌人のうた)。読書能力がひろまるとともに，16世紀にはすでにまず都市中間層市民のあいだで，そしてとくに19世紀以降はついに農村住民のあいだでも，伝統的な民衆文芸のさまざまなジャンルは人びとの精神文化にたいしてますます関係をうしない，さまざまな由来をもつさまざまな種類の読みものが次第にこれにとってかわった。

20). 個々のジャンルの歴史的変転

民衆文芸における個々のジャンルも，その内容と形式が歴史的に変転する

だけではなく，なにがそのときどきに登場するジャンルの種類であるのか，またそのジャンルを享受する社会層はなにか，そのジャンルの社会的意味はなにかという点でも歴史的に変転する。たとえば童話のみならず，かなりおおくの歌謡も，とくに19世紀と20世紀初頭に大人の世界から子供の世界へとうつったことが知られている。また19世紀末におけるドイツの口頭による物語り伝承をみると，たとえば童話と聖者歌謡伝承が後退し，笑劇伝承やおおむねコミックな娯楽のジャンルが優勢になった。伝承・伝播形式もまたおなじままではなかった。こうした変転は，勤労階級や勤労層が社会構成のうえに占める社会的位置と文化的発展水準 -これも歴史的に変化・発展する- に照応してかわる。(このことについてはすでに「口伝-記憶」による伝承の意義にかんする論述でしめした)。民衆文芸の由来と発生，関連する一般民衆の文化的生産活動のさまざまな型態のいずれにとってもおなじことがいえる。

21). 諸ジャンル発展の不均等性

もちろんこのような歴史的変転や変化は，一様に進行したわけではなかった。あるジャンルはある歴史的時期にはきわだってあらわれ，また他の時期には民衆文芸の全レパートリーの姿はうすらいだ。またおおくの題材のタイプ -とくにある一定のバラーデと童話の- 核心は，ほとんど不変のままかなり長い期間にわたり民間伝承のなかにたもたれた。だがたとえば無数の愛の歌謡，おおくの民話は，急激なかつ恒常的な変転にさらされた。他の題材とタイプは，短時間ののちふたたび伝承からきえた。歴史歌にはしばしばこのようなことが生ずる。だから民衆文芸の歴史の特徴として，一方にながく作用する伝統がありながら，他方には，ジャンルとタイプの，また構成と表現形式，さらに伝播-伝承方法の恒常的変化があり，この伝統と変化の弁証法的関係が存在する。同時に，ある一つの時期の民衆文芸とすべての勤労階級の民衆文芸にも，すくなくともわれわれが文献でみるかぎり，多層的な作品がある。それは習俗にむすびついているものから集団的娯楽のための物語り・

歌謡・諺にまでおよび，さまざまな内容や美的要求をもったテキスト・合唱から独唱までの歌曲をふくむのである。

22). 民衆文芸を判断するための本質的基準・民衆の創造的参加

この流動的なすべての現象をむすびつけるものは，民衆の創造的参加の要素である。この創造的要素は，創作においても，また民衆がその生活-思考方法のなかに民衆文芸を創造的に獲得しくみいれていく多様なやり方においても，また民衆文芸を積極的に保存し，あるいは変更をくわえ，活性化していく過程においてもあらわれる。わたしの考えではこれが民衆文芸の本質と概念を規定するための本質的基準であり，その他の基準は二次的な（-すなわち他のなにかと交換しうる）特質をもっている。決定的なことは，この基準自体も -すべての社会的現象とおなじく- 歴史的条件と発展において考察されるということである。

（昭和 59 年 4 月 26 日　受理）